

神奈川県厚木市および愛甲郡清川村の民家に 保存されているニホンオオカミの頭骨

小 原 巖

Iwao OBARA: Skulls of Japanese Wolf, *Canis hodophilax*, Preserved at
Old Private Houses in Atsugi-shi and Kiyokawa-mura, Kanagawa Prefecture

はじめに

ニホンオオカミ *Canis hodophilax* TEMMINCK, 1839
はすでに絶滅したと思われるが、その遺骸が民間
信仰上珍重されたために、今日でも、その頭骨は日本
各地に相当数保存されている。

神奈川県 丹沢 山地 付近のものについては、直良
(1965) が「丹沢山麓およびその山麓地域」の項で、
頭骨10個と尾の乾品1点について詳細に記載した。こ
れによって、この地域にはニホンオオカミの遺物が特
に多く残されていることが広く知られることとなった
が、その後の調査において、さらにニホンオオカミの
ものと思われる数点の頭骨を確認することができたの
で、ここに報告する。

本報告に当り、貴重な資料の調査を許された各頭骨
の所有者の方々、資料の所在等について御教示下さ
り、現地調査に協力下さった柏木喜重郎氏、さらに標
本の同定等についてご助言いただいた今泉吉典博士に
対して感謝の意を表する。

新たにニホンオオカミと認められた頭骨

神奈川県厚木市及び愛甲郡清川村の民家に保存され
ている頭骨のうち、これまで文献に記録されたことが
ないと思われるものは次の8個である。捕獲地につい
ての記録は大部分の資料で失われているが、すべてこ
の地域の旧家に古くから伝わるものであるから、付近
の丹沢山中及びその周辺で捕獲されたものであろう。
捕獲の時代についても明らかでないものが多いが、直
良(1965)等の記録も考慮すると江戸時代末期から明
治時代初期に捕獲されたものと思われる。

(1) 厚木市七沢1267番地、中村昭氏所蔵。頭蓋骨及び

左右下顎骨。産地は七沢。

(2) 厚木市林366番地、鈴木建一氏所蔵。頭蓋骨。

(3) 厚木市及川635番地、島崎一正氏所蔵。頭蓋骨。

(4) 厚木市戸田463番地、小塩一三氏所蔵。頭蓋骨。

(4) 愛甲郡清川村煤が谷1649番地、加藤三郎氏所蔵。
頭蓋骨。

(6) 愛甲郡清川村煤が谷2194番地、岩沢久雄氏所蔵。
頭蓋骨。

(7) 愛甲郡清川村煤が谷2594番地、井上勉氏所蔵。頭
蓋骨。

(8) 愛甲郡清川村煤が谷3219番地、山口茂氏所蔵。頭
蓋骨及び右下顎骨。

同 定

同じ地域に棲息していたと考えられるイヌ科動物と
してはホンDOTタヌキ *Nyctereutes procyonoides viver-
rinus* TEMMINCK, 1844及びホンDOTキツネ *Vulpes vul-
pes japonica* GARY, 1868があるが、これらとの違いは
明瞭であるから、*Canis familiaris*, LINNAEUS, 1758
及び*Canis lupus*, LINNAEUS, 1758の各亜種との識別が
問題となる。今泉(1970a, b)によるニホンオオカミの
識別形質を参考として、次の5形質についてそれぞれの
頭骨の検討を行った。

(1) 顔面部のプロフィールの中凹の程度が弱い。

(2) 前頭甲 frontal shield の膨らみは少なく、正中線
部の凹みは *familiaris* のように顕著ではない。

(3) 左右の鼻骨を合わせた前縁の形はV字状または、
U字状。

(4) 口蓋後縁正中部は湾入する。

(5) 下顎を付けた頭骨を水平面上に置いた場合下顎角

は接地しない。

今回調べた頭骨はいずれも(1)~(4)までの形質に一致する。

なお、形質(4)口蓋後縁正中部の湾入の程度には変異が多い。頭骨が大きく十分に成長した個体では湾入は顕著なものが多く(基底全長 204.3mm の井上標本と 209.0mm の中村標本)、頭骨が小さく若齢な個体(基底全長 185.8mm の鈴木標本)では湾入の程度が弱い傾向があるように見える。

形質(5)については、ほぼ完全な下顎骨をもつ中村標本についてのみ調べることができたが、これも多くのイヌとは異なり下顎角が接地せずバランスよく安定した。

以上の結果から上記 8 個の頭骨はいずれもニホンオオカミ *Canis hodophilax* TEMMINCK, 1839 であると思われる。

各頭骨の特徴

(計測値は表 1, 写真は図 3~9 に示す)

(1) 中村氏標本, 雄?, 成獣

中村家の言い伝えによると、厚木市七沢の七沢城趾付近の氷の切り出し用の池に雌雄 1 対のオオカミが落ちて捕獲された。1 頭は同じく七沢の中村家の本家に、別の 1 頭が中村昭氏の曾祖父傳兵衛氏の所有するものとなった。頭骨は木箱に納められており、蓋の表側は、黒く煤けているが注意深く見ると中央に大きく「三峯」の文字が見える。蓋の裏側に「嘉永八年卯正月吉日中村傳兵衛」と記されている。嘉永 8 年は 1855 年に当たる(嘉永は 7 年で終るが、改元がこの地方にはまだ知られていなかったようである)。おそらく、この時期に捕獲されたものと思われる。頭骨の保存状態は極めて良く、煤けもほとんどないが、頭頂骨の一部が破損し、脳匡には左右とも大きな穴があいている。左後頭頤及び翼状骨間窩右縁部にも破損が認められる。左下顎骨は完全だが右下顎骨は齒列の後方が破損している。歯は左 i2、左の i1 と i2、右 i1 の 4 本が紛失している(歯種の表示は大文字が上顎歯、小文字が下顎歯)。

丹沢産頭骨(今回調査した頭骨及び直良: 1965 pp. 86-112 に記載されている頭骨をさす。以下同じ)としては大形である。頭丈で頬骨弓の張り出しは大きい。Orbital angle (頭蓋骨を水平面上に置いた場合上下の後眼窩突起を結ぶ線と水平面のなす角度)は 34°。 *Canis familiaris* が 53° 以上であり、 *Canis lupus* が

40°から 45°と言われる (ILJIN, 1941) ことから、この頭骨では、頬骨弓が著しく横に張り出していることがわかる。頭蓋骨に下顎骨を付けて水平面上に置くと、下顎角部が接地せずに安定する(図 7-A)。口蓋後縁正中部の湾入は深い。前蝶形骨の外形には、中部に顕著な翼状突起がある(今回調査した 8 個の頭骨のうち鈴木標本と島崎標本以外の 6 個に顕著な翼状の突起が見られた)。

(2) 鈴木氏標本, 雌?

丹沢産頭骨の中では最も小さい。下顎骨はなく、左頬骨を欠き、歯は右 P4 のみが残っている。犬歯部幅、頬骨部幅ともに小さくきしゃな感じがする。前蝶形骨の外形に見られる翼状の突起は僅かに認められるのみ。口蓋後縁正中部の湾入はあまり顕著ではないが明らかに認められる。顔面部のプロフィールは *hodophilax* としては中凹の程度が大きいが前頭甲は膨らみが少なく、正中部の窪みがほとんどなく扁平で *familiaris* の多くとは明らかに区別できる。

(3) 島崎氏標本, 雌?

ほぼ完全な頭蓋骨だが下顎骨を欠く。歯は左の P4 と M1 が残る。比較的小形で頭骨全長と基底全長は丹沢産頭骨の中では鈴木標本に次いで小さい。頬骨部幅が著しく小さい。口蓋後縁正中部の湾入の程度は弱い。

(4) 小塩氏標本

頭蓋骨のみで下顎骨はない。切歯すべてを欠くがその他の歯は揃っている。頬骨弓及び矢状陵後端部は破損している。明治 26 年 (1893) に、祭儀を行ったことを記したとみられる木札が頭骨とともに保存されている。おそらくこの時期に捕獲されたものであろう。基底全長は丹沢産頭骨としては、中等大。口蓋後縁正中部には程度は弱い、明らかに湾入が認められる。

(5) 加藤氏標本, 雄?

後眼窩突起の後方から破損欠失している頭蓋骨前半部。歯は左右犬歯、左 P2、右 P1, P2 の 5 本を欠くが、その他は良く保存されている。顔面プロフィールは中凹の程度がやや強いが、前頭甲の膨らみは少なく正中部の窪みも少ない。左右の鼻骨前縁の形は V 字状。口蓋後縁には、乾燥した皮膚が付着し骨の形を正確には見ることができないが、正中部には顕著な湾入があることは明らかである。

(6) 岩沢氏標本

ほぼ完全な頭蓋骨。下顎骨は保存されていない。頭頂骨左側面に比較的新しい破損箇所があるが、これも

表1 丹沢産地及びその付近に残るニホンオオカミ *Canis hodophilax* TEMMINCK, 1839の頭骨計測値 (mm).

所有者	中村氏	鈴木氏	島崎氏	小塩氏	加藤氏	岩沢氏	井上氏	山口氏
全 長	220.8	203.5	204.8	206+	---	214.4	219.6	227.4
基底全長	209.0	185.8	194.0	202.5	---	200.6	204.3	209.4
頬弓部幅	130.7	108.9	107.5	---	---	117.2	---	123.0
眼間部幅	40.0	26.6	33.6	37.2	40.9	36.6	38.8	39.9
後眼窩幅	39.6	24.7	37.5	37.0	---	36.7	37.0	36.8
犬歯部幅	43.3	28.4	39.00	40.0	---	39.8	41.1±	42.4
後頭顆幅	40.8	---	37.9	40.4	---	40.0	39.6	40.8
口蓋長	102.6	93.0	97.8	102.5	105.3	96.8	101.2	105.6
頬歯列長	89.4	83.4	78.6	90.0	90.7	88.3	89.0	92.7
下顎長	162.2	---	---	---	---	---	---	162.8
P4長(歯冠)	21.4	19.0	22.0	21.4	21.8	20.2	---	21.2
m1長(歯冠)	26.4	---	---	---	---	---	---	---

注：口蓋長では口蓋後縁正中部の湾入を含めない。

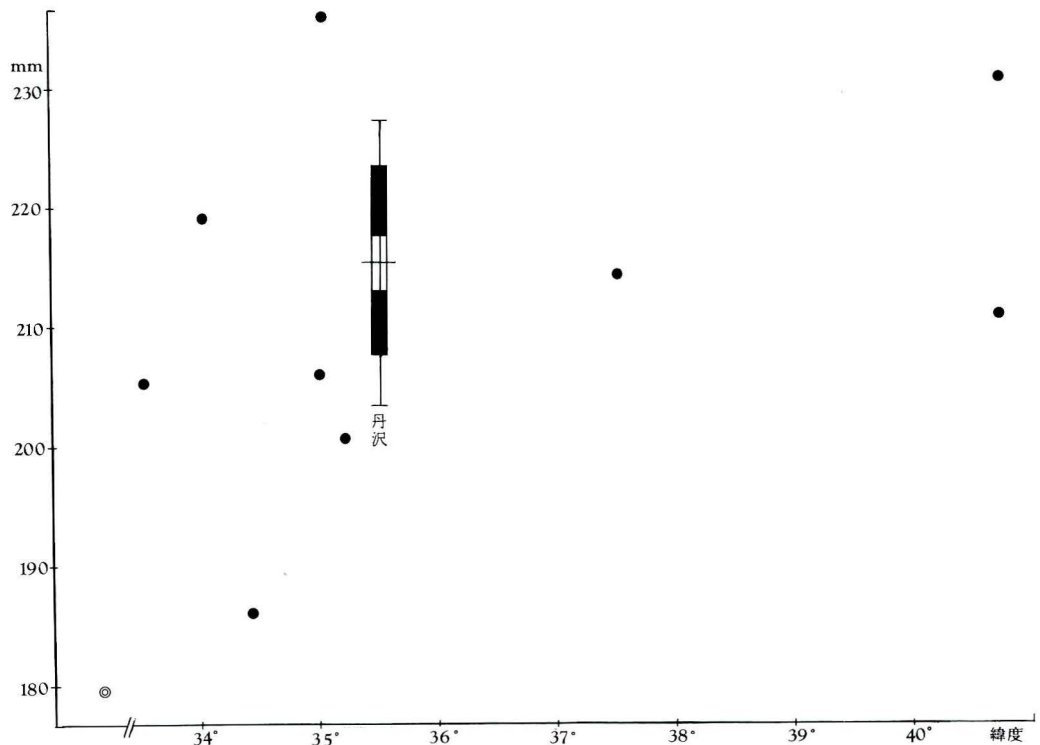


図1 ニホンオオカミ頭骨全長の変異
丹沢産頭骨 (N=13)：中央の短い横線は平均値，黒色部は標準偏差，白色部は標準誤差の範囲。
黒丸は既知の頭骨，二重丸はタイプ標本 (産地緯度は不明)。

表2 既に所在の知られている日本各地産ニホンオオカミ頭骨の計測値 (mm).

	全長	基底全長	産地 (緯度)	測定者
タイプ(Leiden) ♂	179.5 ⁽¹⁾	174.0 ⁽²⁾	日本	⁽¹⁾ 斎藤(1964) ⁽²⁾ 今泉(1970a)
L2(Leiden)		206.0	日本	"
中畑英七	211	---	青森 (40.7 °)	斎藤(1964)
古山勝太郎	231	---	青森 (")	"
NSMT-M100 ♂	214.6	202.3	福島 (37.5 °)	小原
NSMT-M1185	---	198.1	福井 (36.0 °)	今泉(1970a)
栗原弥一	216.4	196.5	丹沢 (35.5 °)	小原
飯田英雅	206.4	---	" (")	"
佐藤公磨	223.0	208.0	" (")	直良(1965)
大矢守三	207.5	195.5	" (")	"
武尚一郎	226.0	214.0	" (")	"
吉岡照子	214.5	198.0	" (")	"
大野君磨	217.0	---	" (")	"
瀬戸良三	200.5	188.0	静岡裾野町(35.2 °)	"
染矢清一	236	---	西三河(35.0 °)	斎藤(1938)
---	206	---	愛知 (35.0 °)	平岩(1981)
BM5.5.30.1 ♂	186 ⁽¹⁾	178.0 ⁽²⁾	奈良鷺家口(34.4 °)	⁽¹⁾ 斎藤(1964) ⁽²⁾ 今泉(1970a)
和歌山大学	219.2	205.2	奈良十津川(34.0 °)	宮本他(1983)
愛媛県博※	205.3	---	愛媛 (33.5 °)	小原

※現在四国産として知られるのは、この頭骨のみ。頬弓部幅 117.7, 犬歯部幅 41.25, 口蓋長 95.6, 鼻骨長 72.1, 頬歯列長85.9, P4 20.5, m1 25.3.

軽微である。歯の紛失はない。丹沢産頭骨としては中等大で、口蓋後縁正中部の湾入は小さいが明らかである。

(7) 井上氏標本, 雄?

頬弓部が破損し、歯のすべて及び下顎骨は紛失している。煤けは認められないが、最近の一時期屋外のほこらに置かれたため、調査時には、表面の一部にフオカビを生じていた。比較的大形で、口蓋後縁正中部の

湾入は鋭く深い。

(8) 山口氏標本, 雄?

頭蓋骨及び右下顎骨。歯は左 p4 及び右 p2 が残るのみ。右頬骨から口蓋骨の一部にかけて破損している。江戸時代末期に、落し穴に落ちたものと伝えられる。今回調べた8個の頭骨のうちでは、頭骨全長及び基底全長は最大であり頭骨全長は、これまでに知られているニホンオオカミのうちでも、西三河産 236 mm (斎藤

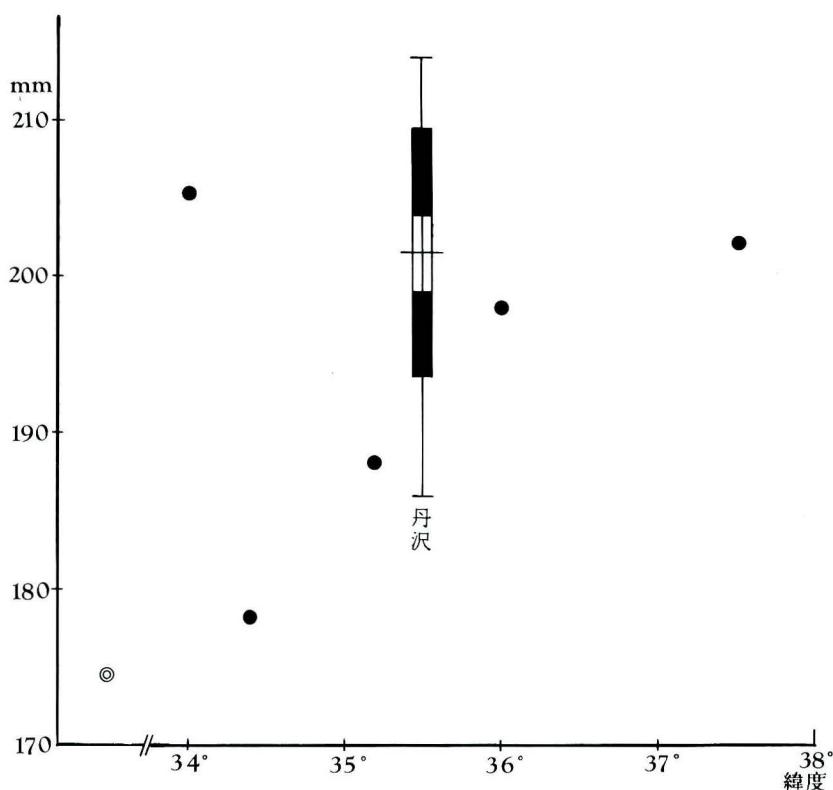


図2 ニホンオオカミの頭骨基底全長の変異
丹沢産頭骨 (N=12), その他の説明は図1と同じ.

1936), 青森県産231mm (斎藤, 1964) に次いで大きい。口蓋後縁は一部破損しているが, 正中中部は強く湾入している。

丹沢産ニホンオオカミ頭骨の大きさ

これまでに知られている各地産ニホンオオカミの頭骨の全長及び基底全長を取りまとめると表2のとおりとなる。性別が明らかでないこともあり, 個体変異が大きい, 丹沢個体群 (=丹沢産頭骨) と他地域産ニホンオオカミとの比較をすることができる (図1, 2)。

丹沢個体群頭骨の計測値の平均値 $M \pm$ 標準偏差 SD 及び標準誤差 SE は次のとおりである。

頭骨全長 (N=13) $M \pm SD = 215.48 \pm 7.98\text{mm}$,
SE=2.21mm

基底全長 (N=12) $M \pm SD = 201.47 \pm 7.99\text{mm}$,
SE=2.31mm

頭骨全長では, タイプ標本の 179.5mm 及び大英博物館標本 (奈良県鷺家口産) 186mm が小さく, 西三河産

とされている染矢氏標本 (236mm) が大きい。これらは, 何れも丹沢産頭骨の $M \pm 2SD$ の範囲 199.53~231.43mm には含まれていない。

基底全長でもタイプ標本の 174.0mm 及び奈良県鷺家口産標本の 178.0mm が小形で丹沢産の $M \pm 2SD$ の範囲 185.49~217.45mm に含まれないことが分かる。

丹沢個体群の基底全長 (mm) の変異係数 $C. V. = (SD \times 100) / M$ は 3.97% であった。手元にある岡山県真庭郡産タヌキ *N. p. viverrinus* (雄6, 雌6) の基底全長は $M \pm SD = 109.89 \pm 4.18\text{mm}$, $C. V. = 3.80\%$ 。同じく岡山県真庭郡産キツネ *V. v. japonica* (雌雄N=13) では $M \pm SD = 144.09 \pm 4.44\text{mm}$, $C. V. = 3.08\%$ であった。ニホンオオカミ丹沢個体群の変異は, 岡山県真庭郡産タヌキ及びキツネのものよりやや大きい, ほぼそれに近いものであった。

なお, 比較のためにイヌ *C. familiaris* (日本犬) の頭骨基底全長の変異係数を計算すると (小原他, 1980 の資料による), 個体変異が大きいことで知られる北海道犬では, $M \pm SD = 162.50 \pm 12.53\text{mm}$, $C. V. = 7.71$

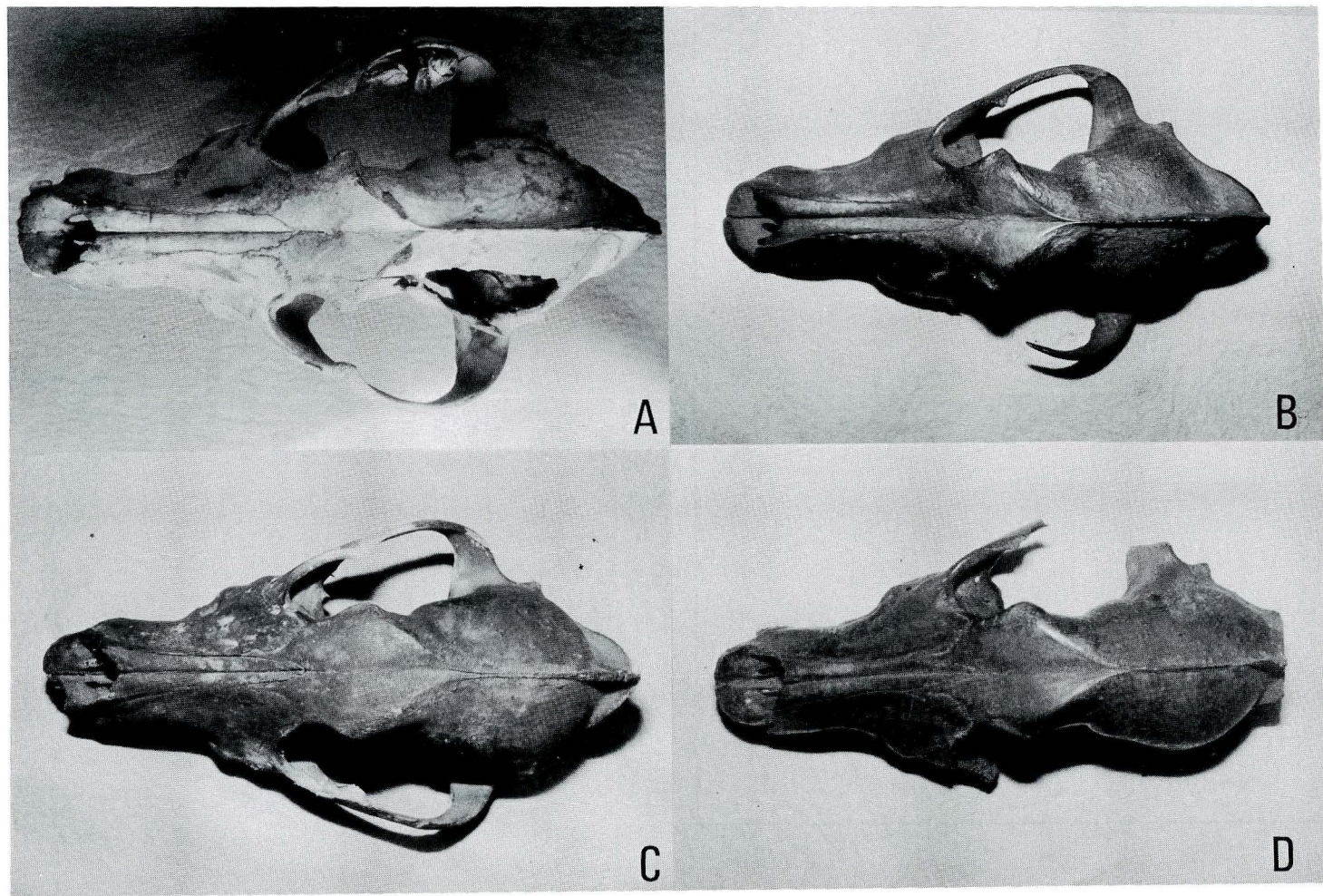


図3 ニホンオオカミの頭骨上面

A 中村氏標本 B 鈴木氏標本 C 島崎氏標本 D 小塩氏標本

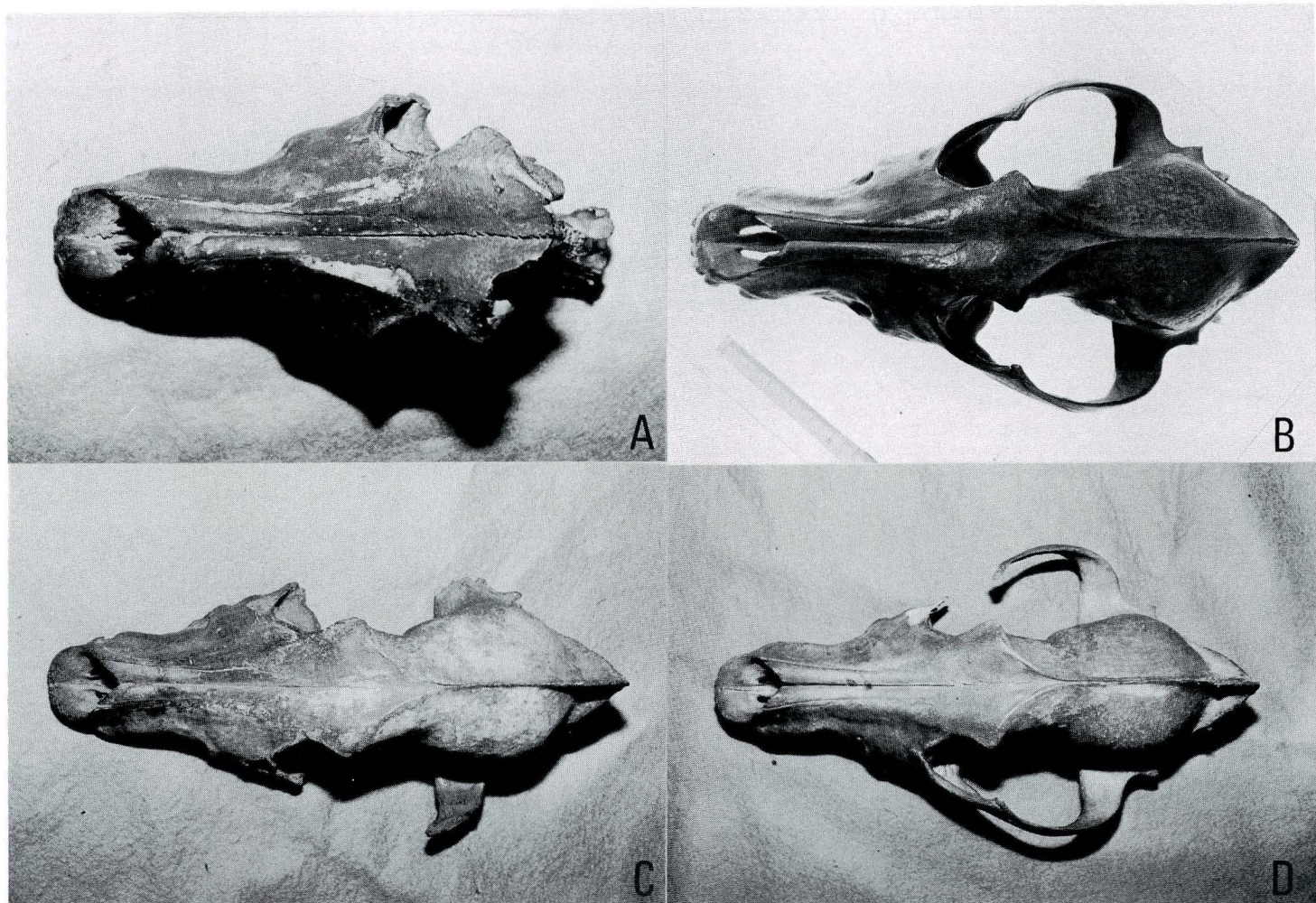


図4 ニホンオオカミの頭骨上面

A 加藤氏標本 B 岩沢氏標本 C 井上氏標本 D 山口氏標本

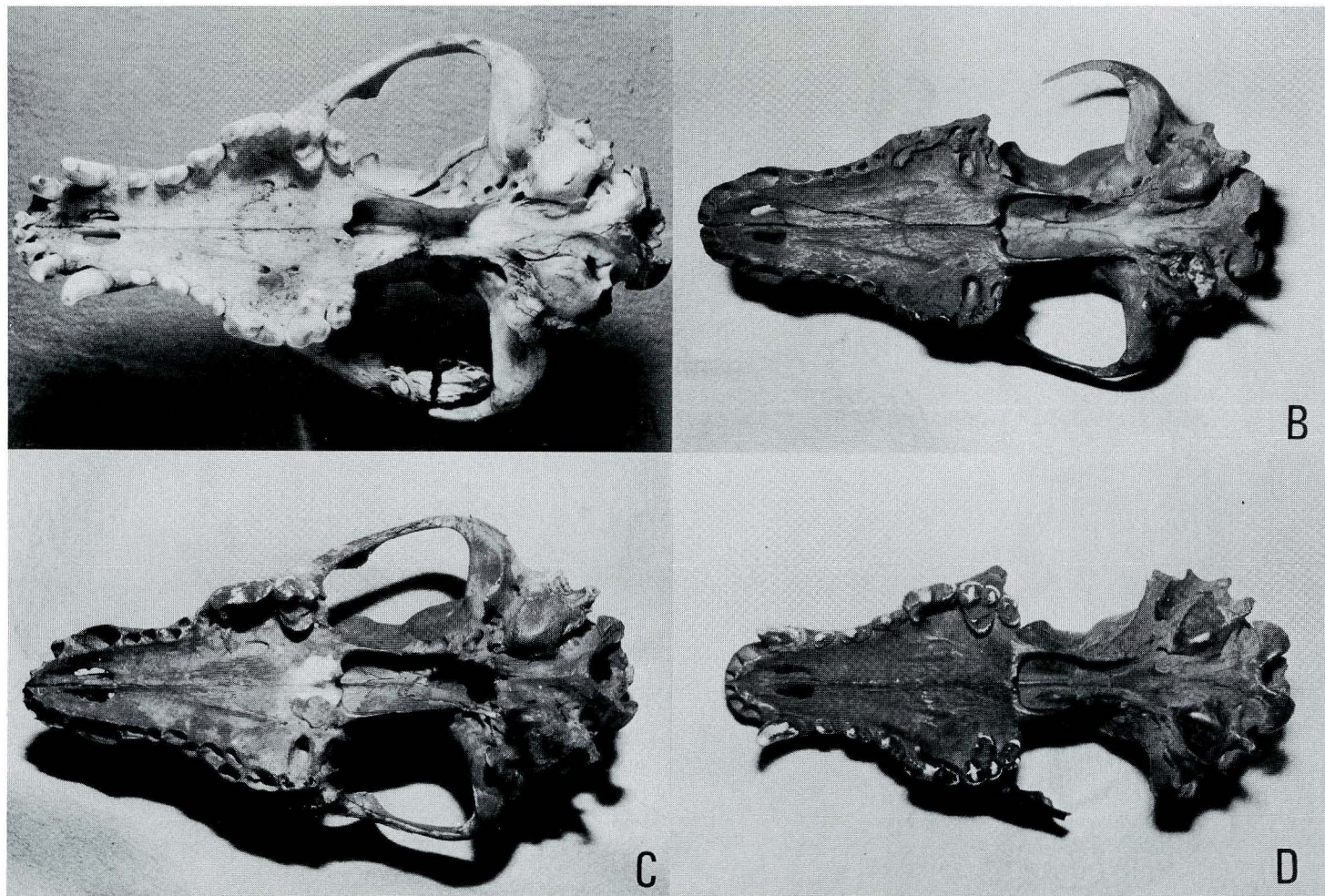


図5 ニホンオオカミの頭骨下面

A 中村氏標本 B 鈴木氏標本 C 島崎氏標本 D 小塩氏標本

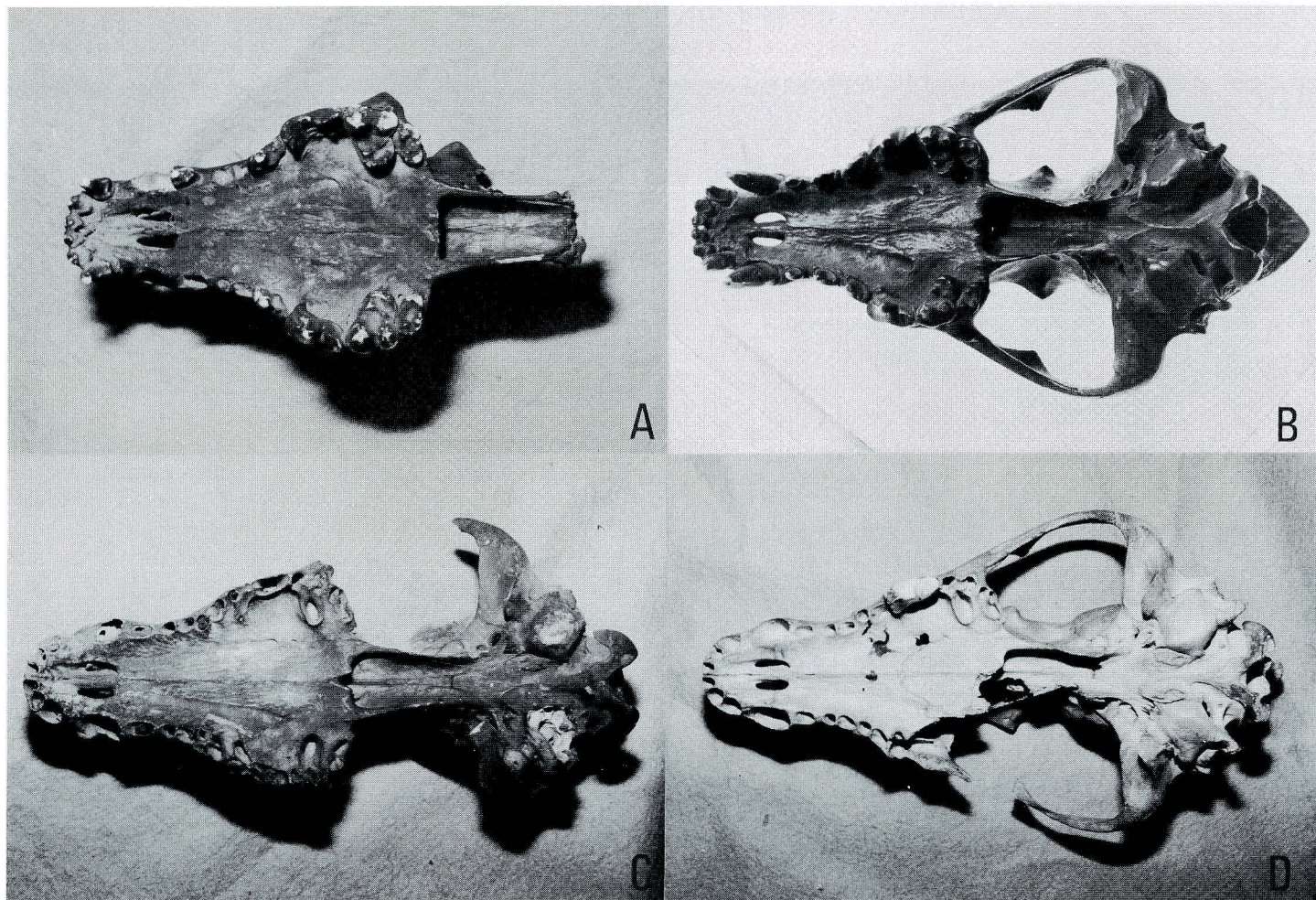


図6 ニホンオオカミの頭骨下面

A 加藤氏標本 B 岩沢氏標本 C 井上氏標本 D 山口氏標本

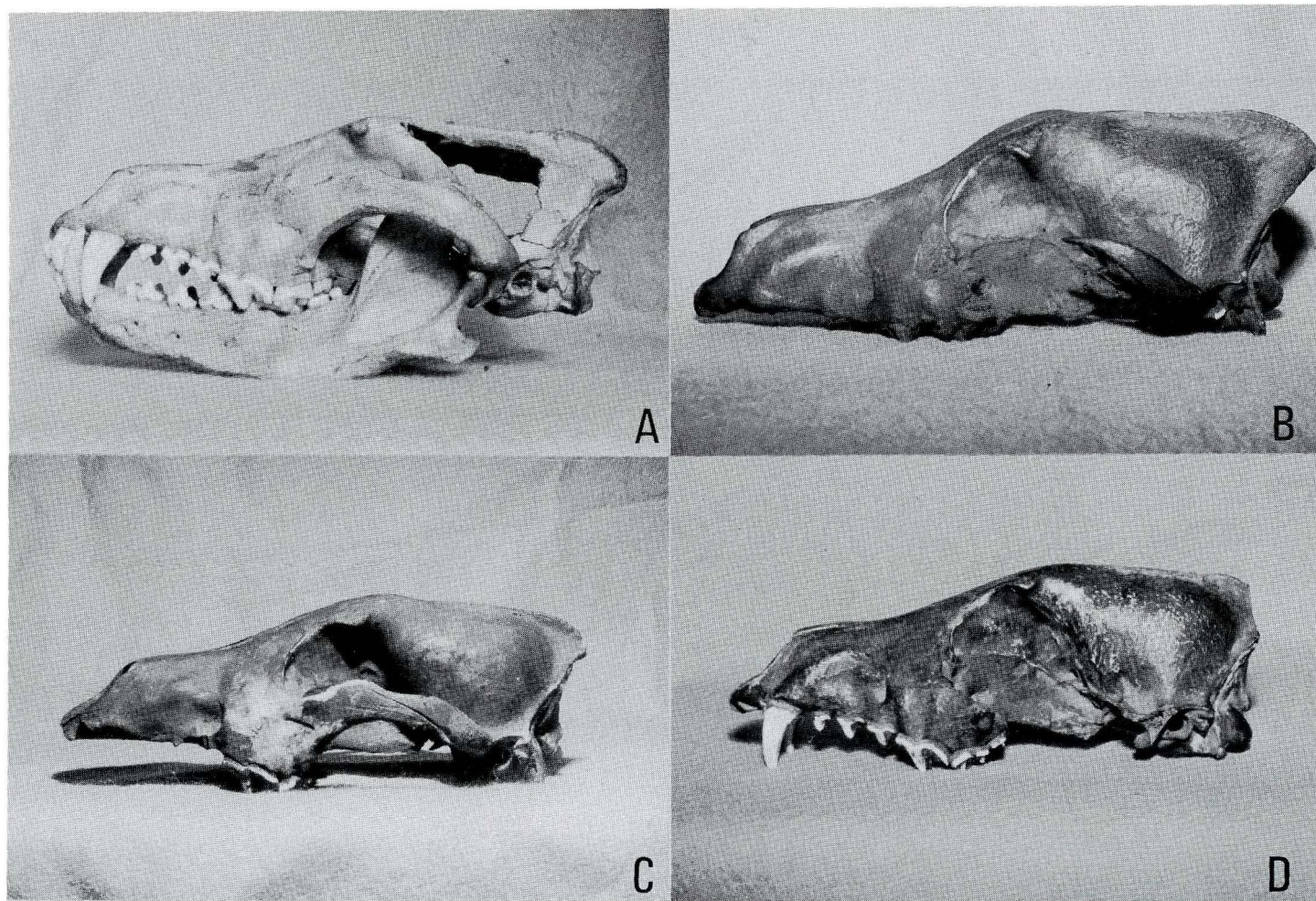


図7 ニホンオオカミの頭骨側面

A 中村氏標本 B 鈴木氏標本 C 島崎氏標本 D 小塩氏標本

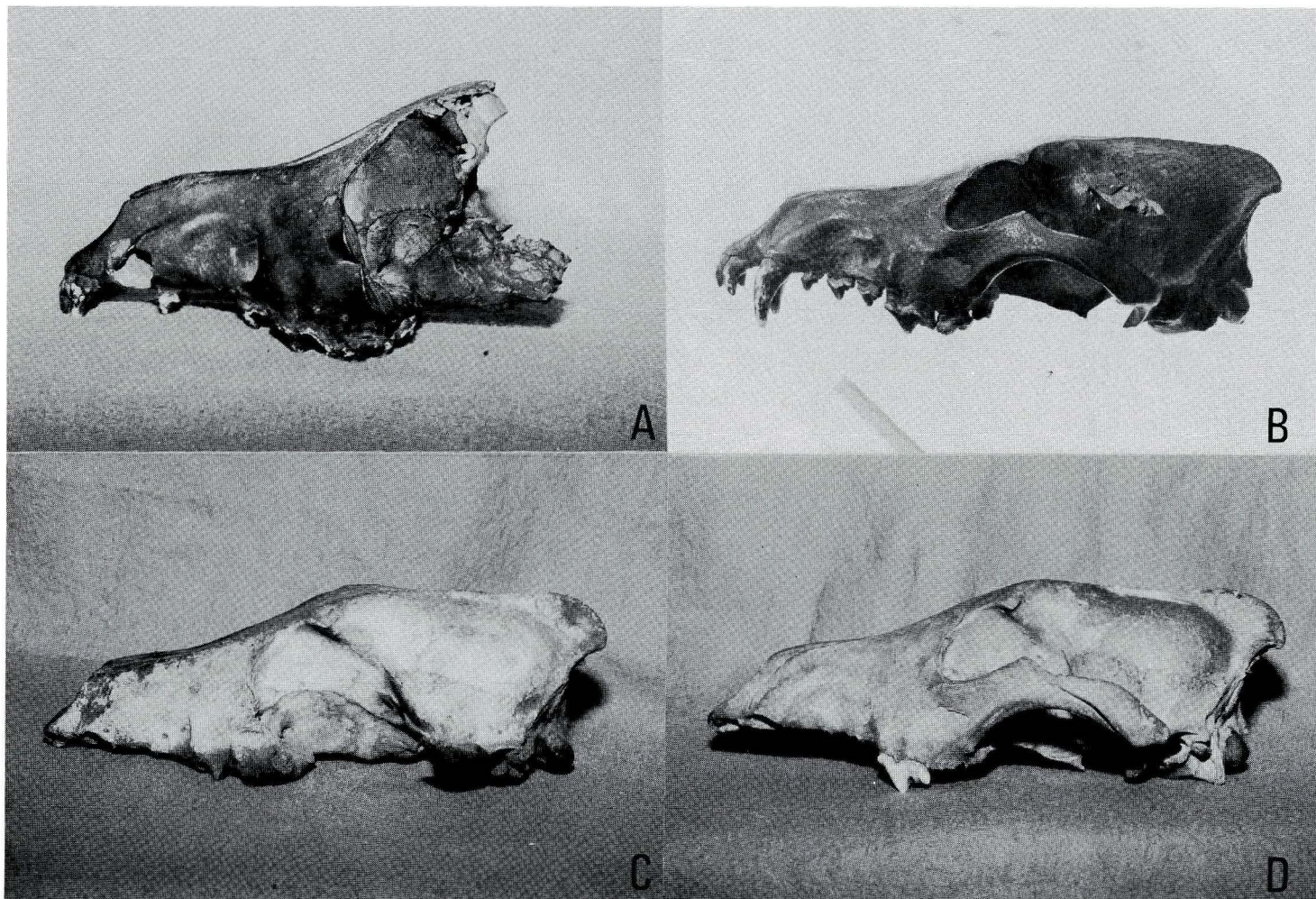


図8 ニホンオオカミの頭骨側面

A 加藤氏標本 B 岩沢氏標本 C 井上氏標本 D 山口氏標本

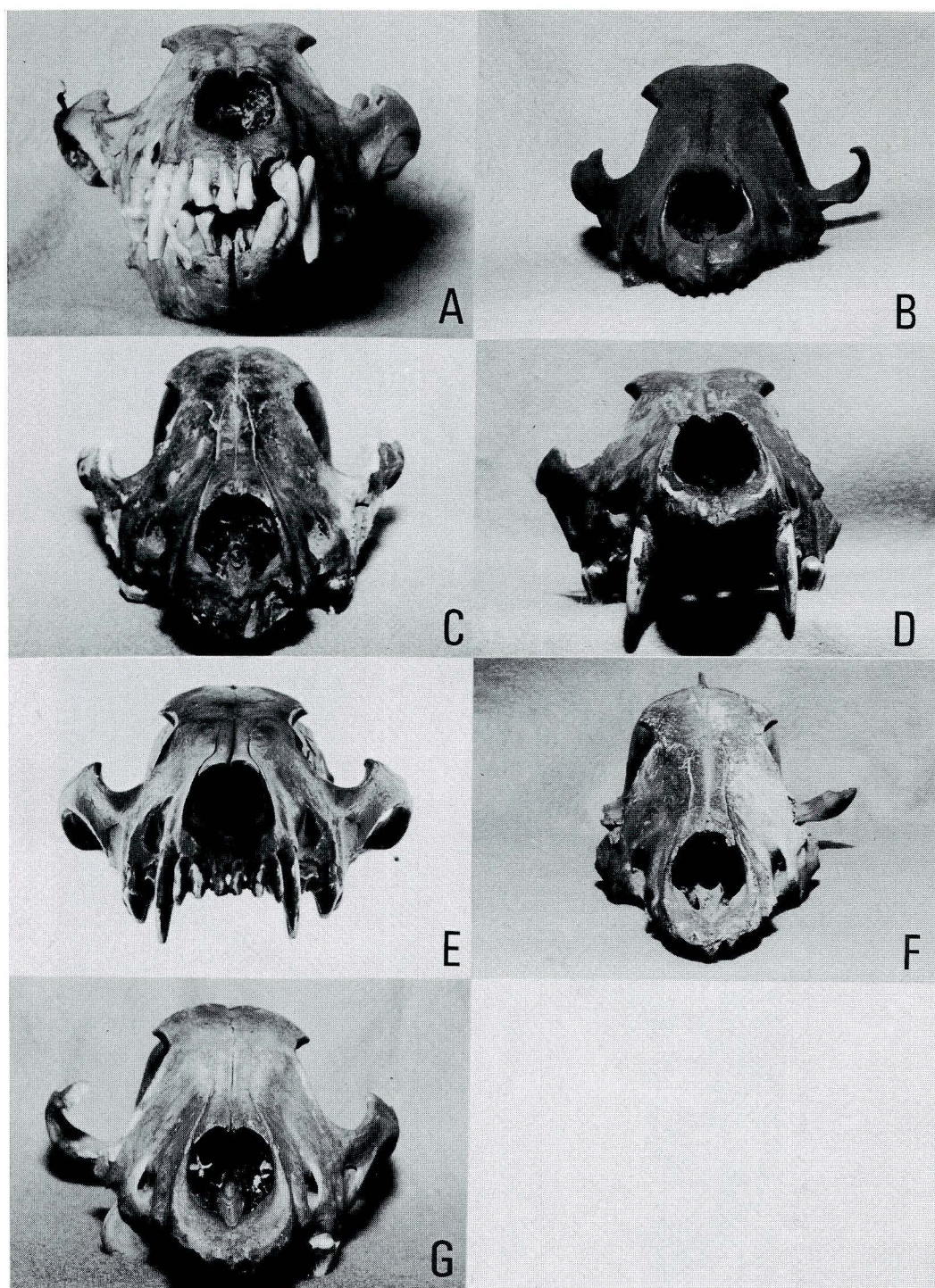


図9 ニホンオオカミの頭骨前面

A 中村氏標本

B 鈴木氏標本

C 島崎氏標本

D 小塩氏標本

E 岩沢氏標本

F 井上氏標本

G 山口氏標本

% (雌雄N=8)。同じく変異の大きい甲斐犬では $152.29 \pm 14.90\text{mm}$, C. V.=9.79% (雌雄N=9) という極めて大きな値を示した。標準体型を設定して体の大きさに変異が少ないように見える四国犬においても, $178.70 \pm 7.47\text{mm}$, C. V.=4.18% (雌雄N=16) となり, ニホンオオカミ丹沢個体群の C. V. 値の方がこれよりもやや小さい。

文 献

- 平岩米吉, 1981. 狼—その生態と歴史—, 308pp. 動物文学会, 東京.
- ILJIN, N. A. 1941. Wolf-dog genetics. *Jour. Genetics*, 42: 359-414 (after MECH, 1974).
- 今泉吉典, 1970a. ニホンオオカミの系統的地位について, 1. ニホンオオカミの標本. 哺乳動物学雑誌, 5: 27-32.
- 今泉吉典, 1970b, 同前, 2. イヌ属内での頭骨における類似関係. 同上, 5: 62-66.
- MECH, L. D. 1974. *Canis lupus*. *Mammalian Species*, (37): 1-6.
- 宮本典子・牧 岩雄, 1983. ニホンオオカミ剥製標本改作と新しくとり出された頭骨について. 和歌山大学教育学部紀要 (自然科学), (32): 9-16.
- 直良信夫, 1965. 日本狼の研究. 289pp. 校倉書房, 東京.
- 小原 巖・今泉吉典, 1980. 日本犬の頭骨及び歯に見られる形態的特徴. 在来家畜研究報告, (9): 139-154.
- POCOCK, R. I. 1935. The races of *Canis lupus*. *Proc. Zool. Soc. London*, pp. 647-686.
- 斎藤 弘, 1936. 石器時代犬の體格とヤマイヌ鑑別私見. 日本犬, 5(4): 1-29.
- 斎藤弘吉, 1964. 日本の犬と狼. 363pp. 雪華社, 東京.

(国立科学博物館教育部)